

村山皓教授を送る

立命館大学政策科学部長 上 子 秋 生

村山先生が退職される時が来てしまいました。私は本来、このような感謝の文章を書くには、全く役者が不足なのですが、私にとって、立命館大学に来て以来、これほどお世話になり、これほど色々な関わりを持った方は他にいないので、これも何かの縁と考えて、この文章を書かせていただくことにしました。従って、本来あるべき、組織としての学部からの見方より、個人的な感覚での文章となることをお許し願いたいと思います。

まず、本来書くべきことを、圧縮して記させていただきます。村山先生は1994年、本政策科学部の開設とともに立命館大学に着任されました。政治学を専門とされ、2010年度日本政策学会著作賞を受賞された「政策システムの公共性と政策文化」をはじめ、多くの優れた研究実績を残されるとともに、2003年度には政策科学部長・政策科学研究科長を、2009年度には再び政策科学研究科長を務められ、政策科学部・政策科学研究科の発展に貢献されました。また、2004年度～2006年度にはカナダのプリティッシュコロンビア大学に客員教授として滞在され、本学と同大学との関係強化に尽力されました。更に帰国後は、政策科学研究科に新設された英語基準コースの教育に中心的な役割を果たされ、政策科学部、延いては立命館大学の国際化に大きく貢献されました。

私が見た村山先生を中心に書かせていただくことをお許しいただけるならば、最初に村山先生とお会いしたのは、2007年4月に初めて英語基準の留学生を含む博士前期課程のサーチプロジェクトと一緒に指導することとなった授業の時でした。メールでしか知らない、学部長経験者と聞いているので重鎮に違いない先生は、私のまえに現れると、意外に気さくな方で、ほっとしたことを今でも覚えています。この年は、私がまだ、公務員として働きながら、客員教授として立命館にお邪魔していた時でした。色々な国からの留学生をどのように指導すべきなのか、全く五里霧中の私の前で、授業を主導し、大学院生のみならず、大学では新米の私にまで指導をいただいたようなものでした。

2008年度からは、私も専任の教員となり、授業以外にも海外出張などでご一緒させていただく機会も得ました。中国の杭州へ一村一品学会のために出張した際、英語も通じない所だしと尻込みする私を少し時間があるので街を見て来ようと引っ張りだしてもらいました。その時の

言葉など通じなくても大丈夫というバイタリティーには本当に驚かされました。お陰で杭州の街を随分と見ることが出来ました。また、村山先生が一村一品運動の提唱者である元大分県知事の平松さんの博士論文の指導者であったことを知ったのもこの頃でした。

2009年度には、村山先生が研究科長、私が研究科担当の副学部長ということで、今度は、学務をご一緒させて戴くことになりました。執行部会議などの席上、一体、今の議題とどう繋がるのかわたしには皆目分からない意見の開陳が始まり、とまどうこともしばしばでしたが、その内、そういった一見奇抜な意見が導く結論が、極めて常識的なものであることに気付いて、楽しく仕事をさせていただきました。また、任せた仕事は完全に任せてくれるという意味でもとても仕事のしやすい「上司」でした。この一年に行った「留学生獲得努力の強化」「日本語基準と英語基準の研究プロジェクトの分離」などは、その後、研究科にとって大きな力になっています。

そして、2010年度からは、その分離された日本語基準と英語基準の研究プロジェクトの双方で授業をご一緒させていただくことになりました。研究主題の定まらない院生に、一見無関係に見える調べ物をさせ、その内に適切な研究テーマを持たせていく手際には、いつも感心させられました。また、夜間にかかる授業で、その後、数多くの機会に夕食を共にさせていたのですが、2度と同じ話をされることがなかったことが記憶に残っています。このことを言うと、ある先生は、「村山先生はいつも前しか見てないからだ。」と言っておられましたが、確かにそれが真実なのかも知れないと思います。

そして、今年には、何と、私が、先生への名誉教授称号授与の提案をし、この文書を書く立場になってしまいました。

考えてみると、この5年、私は、全てお釈迦様ならぬ村山先生の掌の上で踊る孫悟空だったのではないかと考えています。